

# イギリス大学制度の研究

—19世紀の大学改革をめぐって—

小林哲也

まえがき

( 1 )

現存の諸教育機関のうちで大学はもっとも古い伝統をもっている。プラトンのアカデミアのような古代ギリシャやローマの高等教育機関はさておくとして、今日存在するヨーロッパの大学の起原である中世大学の発生は紀元12世紀に遡ることができる。このことはもちろん12世紀の大学が20世紀のそれと同一であることを意味しない。むしろ例えば最古の中世大学の一つである12世紀のパリ大学と今日のパリ大学との間には質的な断絶ともいべきものがあるのであり、これは今日もなお比較的中世的な姿を残しているといわれているオクスフォード大学についても同様である。この相違は大学の歴史的な変化によるものであり、それはしばしば大学の外の権威によってひきおこされ、また同様にしばしば大学内部からひきおこされたものであった。フレクスナー A. Flexner は1930年の著書「大学論」Universities—American, English, German において、この変化を大学のそれを囲む社会の要求への適応とみなし、しばしば保守的、時には反動的とさえみられがちな大学が、数世紀の間にある時は除々に無意識的に、またある時は断乎としてしとげたこの時代への適応こそ、大学の歴史においてもっとも印象的であると述べた。にもかかわらず彼はこの時代の要求と大学との間に、アメリカ社会学者のいうところの「社会的遅滞」social lag があることを指摘し、現代の学術文明の発達とそれに伴う諸問題の発生にもとづく時代の要求に対して、今日大学がどれ程応えているかと問い、大

学を純粋な学術研究の場として確立せしめるところにその解答があるとした。30年後の今日においてわれわれは彼の問いかけを新たな内容をもって吟味し、われわれなりの解答を求める必要がある。ではその場合新しい内容として考慮すべき時代の要求とは何であろうか。

モベリイ卿 Sir Walter Moberly は1949年の著書「大学の危機」The Crisis in the University においてこの問題の分析を行い、時代の要求を科学技術の進歩と民主化の要請と考え、この要求に対して伝統的な古典主義と自由主義の原理にたつ大学が十分に応えることができないところに、今日の大学の混乱と危機があるとした。彼はこれに対してキリスト者である大学人が、大学での研究教授の中核をなすべき価値の問題により積極的にとりくみ、大学の全問題に関して再検討をすべきであると述べた。ここでは彼の論議をこれ以上追わないが、彼の指摘した二つの時代的要求、すなわち民主化と科学技術の進歩は、確かに今日の大学の諸問題の主要な動因をなしていると考えることができる。

社会の民主化の要求は、今世紀において著しく初等中等教育の民主化を促進せしめた。貧民大衆のための初等教育と、特権的少数支配層のための中等教育という伝統的階級的な教育制度は、年齢と能力と適性による累進的な初等中等教育制度となり、「すべてのものに」教育の機会が開かれることとなった。この民主化の動きは大学にもその影響を及ぼさずにはおかないのである。大学の民衆化が求められ、また社会奉仕的な大学が新しい大学の類型として要求されるゆえんである。大学の民衆化ないし民主化は、大学の提供する研究と教育の機会ができるかぎり、少くとも能力の許すかぎりにおいて多くの人々に開かれることを求める。それは純粋な学問研究の名の下に実は国民の一部に奉仕していた大学を、ひろく国民全体のための「社会奉仕の大学」たらしめるであろう。それにともない大学の管理、研究教育の組織、内容などに変革が求められ、なかでも大学教育の内容の多様化とともに量的な拡充が求められるであろう。それはさまざまな問題を含むが、それらの問題は更に現代社会の第二の要求、すなわち科学

技術の進歩のもたらす要請によってより複雑化される。

科学技術の急速な発展は科学技術の研究や実際に従事する人々の養成の急激な増加を求める。民主化を求める大学の量的増加もまづこの分野の増加を目指すこととなる。このことは人文系と応用科学系の量的な比率において後者により多くの比重をおくこととなり、大学全体の雰囲気や従来的人文主義的なものから応用科学的なものに変え、大学教育を一かん性のない相互に孤立した専門教育としてしまう。ここに専門教育に対する一般教育、それも古典的な人文主義ではなく、むしろこの技術時代にふさわしい一般教育の問題が特に教育内容に関し重要とされる。また量的な拡大は必然的には質的な向上を伴わず、むしろその逆の場合が予想されるが、それに対して学的な水準をいかに保つかということ。あるいは多様な社会層、なかでも従来大学教育に縁遠かった階層からの学生の増加に伴う教育的配慮の必要。さらに重要なことには技術系の大学学部の増加は多大の費用を必要とし、今日これに応じうるのは国家あるいは大経営資本だけであるということが、大学の管理あるいは大学の自治、すなわち学問研究の自由の保証の問題をおこす。このように考えるならば、大学の民主化といい、社会奉仕といってもその間に多くの困難な問題をはらんでいることが知られるのである。

本論文は上述の大学制度の諸問題がイギリスにおいてどのように存在し、どのように解決されようとしているかについての研究の一部をなすものである。今日のイギリスにおいて、大学制度の問題は中等教育の問題について人々の関心をひきつつある。それは一方においては1944年教育法において中等以下の教育に一まづ結実した教育の民主化が、いよいよ大学に及びつつあることを意味するとともに、多方急激な科学技術の進歩と関連ある社会の大学への期待の増加したことを意味している。もちろんこのことは今にはじまったことではないし、また現在の問題の理解のためには過去に遡って考察する必要があることはいままでもない。ことに前に述べたように大学制度、とくにイギリスのそれは他のいかなる教育機関より――

いくつかの古いグラマー・スクールを除けば——古い伝統をもって存在しているものであり、この伝統は無視することができない。したがってイギリスの大学制度の考察は、まづ中世に端を発するオクスフォード、ケンブリッジのいわゆる中世大学の考察から始められるべきであり、これらの大学が一種のギルドとして成立し、自治団体としての大学の伝統をつくり、かつ将来の大学の民主化や学問の発達のためにどのような基礎をおいたかが考察されるべきであろう。つぎにこのイギリスの大学制度が19世紀において、産業革命による社会的変動の前にいかに適応しようとしたかということが考察されるべきであろう。それは新大学の発生と中世大学の改革という姿をとるがそれらが当時の社会的要求にどのように応えたかが考察されよう。つづいて20世紀初頭以来の社会的要求、とくに国家的要求が大学に対してどのようにあらわれ、またこれに対して各大学が個々に、あるいは大学補助金委員会を通じてどのように反応したかが考察されよう。そして最後に第二次大戦以後の大学がこれらの歴史的背景の下に、そしてとくに戦後の民主主義と技術の進歩によってもたらされた諸要求により、どのような問題とそれに対する解答をもったかについて考察される必要がある。本論文ではしかしこれらの諸問題のうちの一部、すなわち19世紀において産業革命によってもたらされた社会変動、とくにそのなかでの民主主義と技術の進歩がどのように大学の変革をもたらしただかについて考察するにとどめ、他は別の機会に譲りたいと思う。

## ( 2 )

18世紀の末頃、イギリスの大学は沈滞と無気力の極に達していた。中世12世紀の知的復興の産物といわれたオクスフォードとケンブリッジ両大学は、イギリスの知的センターであることを止めて久しかった。両大学の教授の席は多く空いており、科学、医学、法律などの高級なファカルティは事実上存在せず、わずかにそれらの予備的階梯とみなされていた学芸科に関する教育が、それもオクスフォードでは古典、ケンブリッジでは数学にと

どまったが、行われていたに過なかった。しかもそれらの教育は大学の教授によってではなく、しばしば15世紀の無気力怠惰な修道僧に比較されたカレッジのフェローたちによって行われたのである。そのカレッジも貧困であるが優秀な書生のための学寮という当初の性格を失い、絶対王朝下の新興階級である卿紳階級や富裕商人の子弟のための教育の場となり、しかもそれらのうち優れた青年たちは17世紀の大学の政治的宗教的動揺の故に、むしろ大学外の実業界にひきつけられていったため、カレッジは次第に知的資格と無関係な「良い縁故」によって選ばれた毒にも薬にもならない青年たちによって占められることとなった。知的水準の低下とともに学生数も減じ、1800年には17世紀の半数、両大学あわせて1000人そこそこに減じてしまった。

このような両大学の質量ともの低下は、両大学が英国教会と保守的支配層と密接に結びつけられていたことと関係がある。両大学の諸規則はエリザベス朝以来の諸法律、学則、なかでもオクスフォード大学にあっては大主教ロード William Laud による学則によって定められていたが、これらは一方においては両大学に法人格を与え自治権を与えながらも、他方においては大学の行政を少数のカレッジの長からなる管理機関にゆだねた。カレッジはその設置の事情からきわめて密接に国王や英国教会と結ばれており、このカレッジの長たちによる寡頭専制支配を通じて、英国教会ならびにその主長である英国王の支配権が大学に容易に及んだのである。大学内の旧教的勢力や非国教的要素は除外され、大学は全く英国教会の独占するところであった。「独占の精神は狭く怠惰で<sup>(1)</sup> 圧制的である」と自ら当時のオクスフォードに学んだギボン E. Gibbon が、両大学の沈滞の原因をこの英国教会の独占に帰して難じているのは正鵠を得た批評というべきであろう。

これが18世紀末のイギリスの大学の実情であった。もし眼を転じて大学の外の世界の動きと見るならば、人はその余りの相異に驚かざるを得ないであろう。18世紀末といえは産業革命の真最中であり、イギリスの中世的農村社会は近代的都市社会へと変動の過程にあった。北部および中部の炭

坑地帯を中心につくられた新興都市においては、新しい技術と資本主義的生産様式によって運営される工場が並び、そこには産業的階級、すなわち商工業的中産階級と工業労働者階級とが生れていた。彼らは従来の地主的貴族階級のもつ社会的政治的特権に挑戦し、とくにそのうちの中産階級は旧支配層中の自由主義的傾向をもつウィッグと結び、1830年代までには諸種の特権や拘束を破り、1832年以降のいわゆる自由主義時代において、ついには自ら政治の実権を握るにいたるまで生長したのである。彼らの挑戦は当然大学にむけられた。旧支配層の既得権益から除外されている新興階級として、また彼らの多くがそうであったのであるが、大学への途の閉されていた非国教徒として、彼らは英国教会と旧支配層の手中にあった大学を開放することを求め、またそれとともに旧大学の低い学術的水準を高め、とくにそれが新たな時代の要求に適した内容をもつことを求めたのである。

19世紀のイギリスの大学改革はこのような背景の下に行われた。上述の中産階級の声はまづ19世紀初期においてオクスフォード、ケンブリッジ両大学への批判というかたちをとり、ついで20年30年代において彼ら自身のために従来の両大学とは全く異なる新しい大学をロンドンに設置せしめることとなる。一方オクスフォード、ケンブリッジ両大学においては、これらの外部からの批判に対応して内部からの改革の動きがおこるが、1850年以降はこの内部の自由主義的改革者たちが改革された議会の力を借りて両大学の近代化をすすめることとなる。ロンドン大学もまた19世紀後半に数度の改革によって整備発展されてゆくが、同時にロンドン大学に範をとった市民的大学が地方都市に発達するようになる。こうして19世紀の終りまでにはロンドン大学、改革されたオクスフォード、ケンブリッジ大学、地方大学という三つの類型の大学がイギリスにつくりあげられることとなる。この三類型のイギリスの大学は20世紀に入って新たな時代の挑戦をうけることとなるが、ともかく今日までそれぞれかなり異った特質をもってイギリスの大学制度のなかに存在し、かつイギリスの大学制度そのものの特質をくつりあげている。本論の目的は19世紀の社会変動がどのような改革を

大学制度にもたらしたかをたどることにあるが、その際この三類型の成立を手がかりにしたいと思う。したがって以下の叙述においては必ずしも歴史的継起の順をおわず、むしろはじめから三類型の大学の成立を別々に扱った。しかしそれらの大学が全く孤立してつくりあげられたものではないことはいうまでもない。

## 1. ロンドン大学の成立

### ( 1 )

18世紀末までのオクスフォード、ケンブリッジ両大学の沈滞と無気力は、産業革命とその後の社会に必要であった新しい科学のための高等教育機関を、これらの両大学の外に繁栄せしめることとなった。学術団体としては1663年につくられたロンドンのロイヤル・ソサイアティ **Royal Society of London** があった。それは当時の大学にない自由な新鮮な空気をもって学者たちを育み、17世紀18世紀のイギリスにおける科学研究の中心となったのである。高等教育機関としては非国教徒のアカデミイ **Dissenting Academy** と呼ばれる学校があった。王政復古後の1662年の礼拝統一法はすべての聖職者に国教会の祈禱書承認の告白を要求したが、これによって両大学から多くの非国教徒教師が追放された。彼らは大学の外にアカデミイを開き、大学程度の学術研究のあらゆる分野にわたっての高等教育をさづけた。その第一義の目的は非国教派牧師の養成にあったが、彼らのうちに新しい科学に興味をよせる教師を多く含んでいたことが、新しい科学的知識を必要とする新興商人階級市民階級、彼らも多く非国教徒であったが、の要求に応じ、彼らの子弟の教育機関となったのである。17、18世紀にロンドンやマンチェスター、ブリストルのような地方都市に栄えたアカデミイは、財政的な困難はあったが、しかし当時の大学に劣らない教育をしかもより広い近代的教科によって提供したのである。<sup>(2)</sup>

またオクスフォード、ケンブリッジ両大学の入学を拒否され、あるいは

その教育に不満を持つ多くの学生は外国の大学に学ぶ場所を求めた。カトリック教徒の多くはヨーロッパ大陸に求め、非国教徒の多くはスコットランドの大学に入った。15世紀から17世紀の間につくられたスコットランドの四つの大学は、イングランドの大学とは全く異った特質をもって発達していた。ながい知的な伝統と、16世紀のカルビン派の運動の影響は、18世紀においてスコットランドが炭鉱業を中心に急激な産業化をすすめるとともに輝かしい知的発展をもたらし、その大学を繁栄せしめることとなった。もともとスコットランドの大学は学資がやすく、宗教的拘束はなかった。またその教育内容も広く、18世紀においては文学、哲学とならんで神学、科学、医学の分野の著しい発達があった。ヒューム David Hume, アダム・スミス Adam Smith, リード Thomas Reid らの著名学者が輩出したのはこの時期であった。<sup>(3)</sup> こうした大学の学術的振興を背景に、例えば「エジンバラ・レビュー」 Edinburgh Review のような、当時のヨーロッパにおけるもっとも強力な知的自由主義ジャーナリズムの活動があったのである。19世紀のはじめに、この「エジンバラ・レビュー」がもっとも激しい批判をオクスフォード大学に加え、大学改革運動の口火を切り、またスコットランドの諸大学に学んだブルーム Henry Brougham や キャンベル Thomas Campbell, ジェームス・ミル James Mill のような人々によって、ロンドンの新大学設置の運動が指導されたのも決して理由のないことではなかった。

こうして19世紀の初頭において現存のオクスフォード、ケンブリッジ両大学への不満が高まってきたとき、その解決の範とすべき大学が人々の真近にあったのであるが、このスコットランドの大学とならんで、人々に強く印象を与えた大学に、大陸ことにドイツのベルリン、ブレスロウ、ボンなどの新大学があった。それらは時代に適応した目的、内容、組織をもち、ことにそこでの研究の強調は、イングランドの旧大学における劣った研究内容との対照において、イギリスの非国教徒やその他の大学の現状に不満をもつ人々に強い印象を与えたのである。



これらの訪問者の一人にキャンベルがあった。グラスゴウ大学の卒業生であり、当時文芸誌 *The New Monthly Magazine* の編集長であった彼は、ベルリン、ボン両大学の訪問によっていたく刺激をうけ、ロンドンに同様な大学を設置する考えをいだいた。そして若干の有志者と画策するところがあったが、1825年2月9日の「ザ・タイムス」紙にウィッグの進歩的政治家であったブルームにあて、ロンドンに大学を設置する意図を述べた書簡を発表した。これは多大の反響を呼び、その結果1826年には資本金15万ポンドの株式会社がつくられ、政界、財界、学会の有力者25人からなる創立委員会がつくられた。創立委員会は多くのベンサム主義急進派に属する人々を含んだが、なおこの支持者にはオクスフォードやケンブリッジ大学から除外されていた非国教徒、カトリック教徒、ユダヤ教徒らを含み、また哲学的急進派や非国教徒に支持を求めていたウィッグ政党人をも含んでいた。

この新しい大学はロンドン大学 *London University* と名づけられ、1828年にガワー街に開かれ、その年300人の初の学生をいれた。この新しい大学はその範をオクスフォードらの古い大学にとることは一切なかった。その代りに範とされたのはスコットランドの諸大学、なかでもエジンバラ大学と、ドイツの諸大学、なかでもベルリン大学であった。<sup>(4)</sup> これらの大学はいつでもオクスフォードなどとは異り、カレッジではなく専門学部制度が確立しており、学生の多くは大学都市あるいは近隣に住み、比較的低廉な学資で学ぶことができた。この大学は「国内の甚だ重要な部分を占める」ロンドンの中流階級に欠けている教育の機会を与るえとジェームス・<sup>(5)</sup>ミルは述べたが、キャンベルもまた400ないし500ポンドから4,000ないし5,000ポンドの小財産をもった「中流富裕人」のためのものであると考えた。疑いもなく彼ら創設者の考えには、スコットランドやドイツの大学に範をとったロンドンの市民階級のための比較的低廉な通学制(非カレッジ制)の大学という構想があったのである。事実授業料は年25から30ポンドであり、当時オクスフォードにおいて年200から250ポンドかかっていたこと

も比べるならば、食費などを別に計算に入れてもいかにも低廉であった。教授方法はオクスフォードのようなチューター制度ではなく、一切教授の講義によった。内容は古典語、英語、現代外国語、数学、自然哲学、物理、化学、動物、植物、経済、法律、機械の外、各種の医学学科など多岐に及んだ。

もっとも大きな特長の一つはその非宗派性であった。当初非国教徒の一部から出されていた神学の教授をおく案は創立委員会によって拒否され、それよりロンドン大学はいかなる宗派にも属せず、いかなる宗教的制限を教師学生に加えることなく、またいかなる宗教教育もしない方針を堅持した。この大学の非宗派的ないし世俗的傾向に対して、自由主義的な国教徒であったトーマス・アーノルト **Thomas Arnold** は「このガワー街の無神大学」と呼んで警告を発したのであったが、国教会の正統派は更にそれ以上大いに刺激されたのである。

## ( 2 )

ロンドン大学は設置されたものの勅許状を得ていなかった。勅許状を得ようとする大学の動きは、新しい大学の創立に反対するオクスフォードおよびケンブリッジ両大学や、またロンドン大学の世俗性に反対する英国教会によって阻まれた。そればかりではなく英国教会側は1828年に首相ウエリントン侯 **Duke of Wellington** を議長とし、カンタベリイとヨークの大主教を含む集会を開き、ロンドンに英国教会の原理に基いたキリスト教を、他のさまざまな分野の学芸科学とともに教える大学をつくることを決定した。この計画は速かに進み、1831年には国王を後援者とし、カンタベリイ大主教を視察者とするキングス・カレッジ **King's College** が勅許状を得て創立されることとなった。学科課程は宗教道徳、古典、数学、自然哲学、化学、博物学、論理学、英文学、商業原論、一般史、近代語などを含んでいた。1831年には114名の学生をもった。

この結果ロンドンには二つの異った背景をもった大学ないしカレッジが存

在することとなった。旧い方はウィッグと非国教徒により支持され、新しい方はトーリーと国教会によって支持され、また前者は勅許状をうけておらず、後者は勅許状はうけていたが、しかし独自に学位号を授ける権限は与えられていなかった。これらの新しい高等教育機関に学位を授ける権限を与え、オクスフォード、ケンブリッジ両大学にならぶ大学をつくろうとすることは、その独占の破れることを恐れる両大学によって強く反対された。結局一種の妥協策がつくられ、1836年に勅許状がだされてロンドン大学はユニバーシティ・カレッジ **University College** と改称し、カレッジとしての法人格が与えられ——もはや株式会社ではなくなった——、また同時に別の勅許状によってロンドン大学 **University of London** と呼ぶ全く新たな大学組織がつくられたのである。

この新しいロンドン大学は文芸、医学、法律の学位を与える権限をもち、ユニバーシティ・カレッジおよびキングス・カレッジで学んだ学生に試験を課し、学位を与えることとなった。またこの二つのカレッジ以外の教育機関も適当であると認められた場合、大学と特別な関係を結びその学生に学位試験をうけさせることができた。<sup>(6)</sup>後に1858年になって医学を除く他の学位に関して、大学レベルの教育機関または私的な学習によって定められた課程に従って学ぶものは、誰でも大学の学位試験をうけられることとなった。

大学の行政機関は総長、副総長および評議会 **Senate** であり、勅許状によって評議会は「試験委員会をつくり、ケンブリッジの評議会館において試験官としての機能を果す文芸科学に著名な人々」<sup>(7)</sup>からなるとされた。1836年に国王によって任命された36人の評議員 **Fellow** にはブルームのような政治家の外、トーマス・アールド、ファラディ **M. Faraday**、ロジェット **P. M. Roget**、ジョン・オースティンス **John Oustins** のような著名な学者が多く加わっていた。彼らの声望や熱意ある努力によってこの新しいロンドン大学の学位はすぐに高い評価を勝ち得た。なかでも医学博士号はイギリスにおけるもっとも良い資格と認められたのである。1858年に大学の学位修得者によってコンボケーション **Convocation** が組織され、

大学の行政の一部に関与することとなった。

こうしてできあがったロンドン大学はそれ自身では教育をしない、単なる学位のための試験機関として存在したわけである。これはいろいろな方面ことにユニバーシティ、キングスの両カレッジの大きな不満を導く結果となった。両カレッジの教員たちは彼らの教えた学生のうける試験には全く関与することができず、外的な試験によって教授内容が規正されることに不満をもったのである。再度にわたって両カレッジの大学よりの分離が計画され、また議会においても再三勅命委員会を任命してこの問題を研究させた。1888年のセルボーン Selbonne 委員会はロンドン大学が試験団体であるとともに教育機関であるべきであると勧告したが、つづく1892年のグresham Gresham 委員会はその勧告の線に従ってより詳細な案をつくり、その結果1898年のロンドン大学法がつくられた。それによると大学はその定めた教授綱目に従って、私的または何らかの教育機関で学ぶ「学外学生」 External Student に試験をして学位に与えることは続けるが、なお「学内学生」 Internal Student として大学の構成校であるカレッジで学ぶ学生をもつこととなった。構成校としてユニバーシティ、キングスの両カレッジの外に多くの医学校、神学校、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス London School of Economics (1895年創立)、あるいはベッドフォード・カレッジ Bedford College のような女子のカレッジ、また1851年の大博覧会以後ロンドンに設置された工業カレッジ Royal College of Science, Central Technical College of the City and Guilds Institute や、農業カレッジ South-Eastern Agricultural College などを含んだ。

これらの多くのしかも多様なカレッジを一つの大学にまとめることは多くの困難をともなった。1909年のホルダン Haldane 委員会はこの問題を扱い、その勧告にもとづいてつくられた1929年ロンドン大学法は、大学の構成管理に関する問題に決着をつけることとなった。大学には八つの学部 Faculty がおかれ、大学の構成校はそれぞれの専門に応じて文、理、工、経、医、法、神学、音楽のうちの一または二以上の学部に属し、大学全体

を通ずる専門教育の連繋が可能となった。例えばすべての医学校やその他のカレッジ、例えばユニバーシティ・カレッジの医学課程は医学部に属し、同様にユニバーシティ、キングス、その他のカレッジの文科課程は大学の文学部として一つのまとまりをもった。また新たに大学の行政機関として財政を扱う **Court** と、学術に関する **Senate** をおいた。セネットは総長、副総長、事務長、コンボケイションの会長と、9の主要カレッジの長、学部によって選出された教授代表、コンボケイション代表など55人からなり、一方コートはセネットの代表、政府代表、ロンドン市当局代表など17人からなった。それらはいくつかの委員会によって助けられた。またこれを機会に大学全体を一つの校地に集める計画もたてられ、その一部は第二次大戦後大英博物館裏に大学本部 **Senate House** その他がたてられたことによって実現した。しかし1930年にフレクスナーが投げた疑問、すなわち彼の言葉によれば「私にはいかなる意味においてロンドン大学が一つの大学であるのか全く理解し難いことを告白せねばならぬ……。それは多様な質と目的をもった多様な機関の周りに輪をえがいたものにすぎない<sup>(8)</sup>」という、このような連合大学 **federal university** の持つ欠陥に向けられた問は十分解答されないままにいまだに残っているとされる。

### ( 3 )

このようにしてつくられたロンドン大学のもつ特長と、そのイギリスの大学制度全体における意義を概括してみよう。恐らくまづ第一にあげるべきことは、ロンドン大学は後に述べるオクスフォード、ケンブリッジ両大学の「キリスト教＝古典的」<sup>(9)</sup> 伝統に対して、イギリスの大学のなかにモベリイ卿のいわゆる「リベラル」<sup>(1)</sup> な伝統を注ぎこむことに貢献したことであろう。このリベラルな伝統とは啓蒙主義とドイツ観念論の影響の下に、18世紀末より19世紀にかけてドイツの大学の理念となった人文主義的の大学理念に通ずるものである。モベリイ卿によればそれは知識の進歩をもって大学の第一義的な任務とし、学問のための学問という態度にもとづいて大学の

機能を国家や教会から独立せしめ、宗派的に中立を保つものであり、また教授と研究の自由や、学生の学ぶ自由が尊重されるといった内容のものであった。スコットランドおよびドイツの大学の影響をうけて成立したロンドン大学は、上述のような「リベラル」な伝統をイギリスの大学のなかにもたらすことに貢献したのである。しかしこのような理念がイギリスの大学の主要な理念となったのは実は19世紀の後半のことであった。そしてそれには必ずしもロンドン大学関係者ばかりではなく、後に述べるような多くのオクスフォード、ケンブリッジ関係者の貢献があったし、またとくに1870年以降の科学技術教育発展の必要がそのような理念を強めた。例えば大学の第一義的な機能は研究であることを始めて述べた公的な機関は、1873年の「科学教育と科学の促進に関する勅命委員会」であった。しかしその委員長は1870年には自身の名を冠した著名な実験室をケンブリッジに設置し、それに先立つ1836年より1856年まではロンドン大学の総長であったデボンシャー公ウィリアム・キャベンディッシュ **Duke of Devonshire William Cavendish** であったのである。

もちろんこの「リベラル」な伝統がドイツの人文主義的大学の伝統と全く同じであるとはいえない。それがつくられるにあたっての功利主義者たちの影響を無視することはできない。彼らは知識をもって社会進歩のもっとも有力な武器と考え、それをひろく中産的市民階級に開放することを目指した。この考えはロンドン大学の「リベラル」な伝統の中に強く生きていくばかりでなく、その後の市民的<sup>(11)</sup>地方大学の中に強く続いた。しかもこのことが大学教育を決して狭い実用的専門教育にとどめることを意味しなかったことは、例えば後にジョン・スチュワート・ミル **John Stuart Mill** が自由教育的<sup>(11)</sup>大学論を述べたことによっても知られるであろう。さらに例えばベンサムがその **Chrestomathia**<sup>(12)</sup> に抱懐したような、人間知識の全分野を大学の中にとりいれようとする態度はロンドン大学の中に生き、また後の新大学の中にひきつがれてゆくのである。

また功利主義者の影響はロンドン大学を非宗派的ないし世俗的なものと

するのに力あった。事実は大学の創立期評議員の一人であったトーマス・アーノルドが、大学は宗派的ではないにしても宗教的であるべきで、あらゆるバチュラー・オブ・アーツの候補者はギリシャ語の四福音書の一つあるいは使徒行伝と、聖書史の試験をうけさせなければいけないと1837年に提案したが、これは多くの反対にあい、ユニバーシティ、キングスの両カレッジもそれぞれ異った理由ではあったが反対をした。その結果翌年ヘブライ語の旧約聖書とギリシャ語の新約聖書の試験がアーツの学位候補者に選択として課せられることとなり、アーノルドは評議員をやめることとなるのである。これは疑いもなく、ユニバーシティ・カレッジ創設の際にすでにそれを全く世俗的なカレッジとして出発させることに成功した功利主義者たちの勝利であった。このロンドン大学の例にならってこれよりつくられた新大学はいづれも非宗教的な性格を明確に保持することとなるのである。

近代科学の諸分野が伝統的な文芸科の諸科目とならんで教育の内容にとりいれられ、それが学部制度による課程に組み入れられ、教授の講義を中心として教えられたことは従来の旧大学とは大きく違う点であった。また低廉な学資により、しかも大多数の学生が自宅から通学し、その結果従来の旧大学には手のとどかなかった階級に大学がひらかれたことは、これから後の市民的地方新大学の先駆となるものであった。

ロンドン大学が首都の中産階級のためのものという市民大学の性格は、教育内容にかかわりをもつとともに行政の面にも特色を与えた。創立以来そのセネットは絶えず大学外の人を加えていたが、1929年につくられた財政的最高機関であるコートには4名の政府代表と2名のロンドン市当局の代表を加えている。このように大学の行政機関に学外のものを入れることは、市民的ロンドン大学およびその他の新大学と、大学の行政を一切学内のものによって行うオクスフォード、ケンブリッジ両大学との最も大きな差の一つである。

連合大学というロンドン大学の特色は、その歴史と地理的条件に背う

が、その後ダラム、ウエルズ、ビクトリアの三大学によって模倣された。それについては後で述べる。またロンドン大学のみ「学外学生」制度はこの大学が単にロンドンの内からばかりでなく、全国ないし植民地にさえ学生をもつこととなり、ロンドン大学をしてただロンドン地区の地方大学にとどめることなく、更に全国的、ないし英帝国の大学たらしめることとなった。更に地方の新しい大学がまだ学位を独自に授けるまでにいたっていない場合、ロンドン大学の学外学位をそれらの大学の卒業生にとらせることで、その新大学の水準を高め、やがて完全な資格をもつ大学とさせることができた。この後の地方の新大学はほとんどこの恩恵に浴することとなるのである。

以上のようにロンドン大学は従来のオクスフォード、ケンブリッジ両大学の独占を破り、全く新しい大学の理念と構造をもたらすことにより、その後の市民的新大学の発展に貢献したのである。しかも更に注目すべきことは、このロンドン大学の成立がオクスフォード、ケンブリッジ両大学の内外の批判者たちを力づけ、ついにこれらの中世的大学の改革をすすめるにも役立ったことである。それについて次に述べよう。

## 2. オクスフォード、ケンブリッジ両大学の改革

### ( 1 )

近代的なカリキュラムをもったロンドン大学の成立、なかでも宗教的拘束を全く廃止したユニバーシティ・カレッジの成立は、オクスフォード、ケンブリッジ両大学の古い体制と内容に対する批判者たちに具体的な比較的批判の基礎を与えた。功利主義者、非国教徒、科学主義者、ウィッグなどに支持されたロンドン大学、とくにそのユニバーシティ・カレッジは「オクスフォード、ケンブリッジに基礎ををおいたトーリーの支配に対する政治的挑戦となった。」<sup>(13)</sup>「改革以前の議会はわれわれに常に同情を寄せていた紳士の集りであった」<sup>(14)</sup>とはオクスフォード、リンコルン・カレッジの長であ



り、自らオクスフォードの改革者の一人であったパチソン Mark Pattison の言葉であったが、1832年の議会改革の結果これらの紳士に代って新興商工業階級を代表する自由主義政党人が議会を支配するようになると、両大学の改革もまた近いことを思わせたのである。功利主義者、非国教徒、科学主義者、あるいはマンチェスター派の商工業者の支持を受けた自由主義者たちは、旧大学の時代おくれの低い水準の教育内容と、英国教会による両大学の独占に対して、ことにその後者に対して批判をした。そして議会の力をもってその改革を企て、結局両大学における英国教会の独占の排除に成功したのである。とくに注目すべきことは、この外部からの圧力に対して大学内部からの批判勢力が呼応し、ことに教育内容の改革に尽したことである。これらの力によってオクスフォード、ケンブリッジ両大学は19世紀の末までには近代的な大学へと脱皮することができたのである。

19世紀の後期に大規模な改革が行われる以前において、オクスフォード、ケンブリッジ両大学の内部に批判の声や改革の動きがなかったわけではない。教育内容に関していえば、オクスフォードでは1800年学位試験規則 **Public Examination Statute** を改正し、従来たんに口述試験のみであったのに対して筆記試験を加え、また学部学生の課程を普通 **pass** と専攻 **honours** にわけて、後者においてより高度な内容を課することにした。1807年には専攻課程に古典と数学の二つの課程をおいたが、この専攻課程にはただちに高い社会的威信を得たのである。ケンブリッジにおいてはすでに1722年に筆記試験が採用されていたが、1748年にトライポス **Tripes** と呼ぶ専攻課程が数学に関しておかれ、これが1824年には古典についてもおかれることとなった。試験制度が改革され課程がひろげられたことは、また18世紀に約20の、しかもその多くは自然科学や数学の教授の席が両大学におかれたことと相応する。1850年までにオクスフォードの専攻課程は数学、自然科学、法律、現代史、神学を含むことになり、またケンブリッジのトライポスは1851年までに自然科学と道徳科学を含むようになった。これらは必ずしも大部分の学生に関する普通課程の内容の改善を

ともなわなかったが、しかしやはりその水準を高めることには役立ったのである。

教育内容の改善に比較しては、大学の英国教会の独占的支配を除こうとする批判や試みは成功しなかった。18世紀合理主義の影響を比較的強くうけたケンブリッジにおいては、1780年代に知的急進運動がおこり、大学の改革、ことにバチェラーの学位の条件から英国国教徒たるべきことを除こうとする動きがあった。しかしこれらの動きは、とくにその後のフランス革命とナポレオン戦争に対する保守派の反動によって全く失敗した。

19世紀の初頭、議会改革の前夜にあって旧大学、ことにオクスフォード大学に対して強い批判の狼煙をあげたのは、「エジンバラ・レビュー」*Edinburgh Review* であった。これは急進的ウィッグによってつくられ、政界ならびに産業界の中に強い支持を得ていた。「エジンバラ・レビュー」は1808年より三年にわたってオクスフォード大学の教育の古典偏重を攻撃し、その内容を有用性の基準をもって改革し、現実世界の事件や変転に関りのある教養人をつくるために現代的教科を導入することを求めたのである。これより1830年代にかけて新興中産階級を代表する旧大学改革の声が諸所にあがった。たとえば10年の後ジェームズ・ミルは「進歩に対して敵対的な教育機関とは全く道理にあわないものであり、人間の想像の及ぶももっとも邪悪なものである」と述べて「教会と結びついた」両大学の中世的保守主義を非難した。<sup>(15)</sup>

これらの批判のうちでもっとも代表的であったのは、1831年および1834年の「エジンバラ・レビュー」にのったエジンバラ大学歴史学教授ハミルトン卿 *Sir William Hamilton* のものであった。彼はオクスフォード、バリオル・カレッジ *Balliol College* の出身であったが、またグラスゴー大学に学び、その経験からスコットランドおよびドイツの大学を頭において旧大学の批判を行ったのである。彼は両大学への教会の権力の干渉を破り、大学をナショナルな機関とすべきことを主張し、両大学の完全な改革を求めた。すなわち彼によれば今日教会権力の下にあり、不十分な教育内容の故

に非難されているカレッジは、元来大学よりあとにできた私的な機関であったのであり、それらは不法にも大学の教育機能を乱用し、大学を英国教会の独占するところとしてしまったのである。この改革は大学のカレッジへの優先を回復するところであり、そのためには昔あったようなホール、すなわち宿舎を復活し、宗派に制限なくすべての資格ある者を入れる必要がある。しかし大学は現在カレッジの支配するところであるから、大学の改革には国家による干渉が必要である。彼は「愛国的国王と改革的政府、改革された議会をむかえて、われわれの期待は決して空しくはないと信ずる。教育學術の改革は實際のところ政治的更新のもっとも偉大な恩恵の一つであり、また多分その価値のもっとも確実な証明であろう<sup>(16)</sup>」と述べて、1832年議会改革の結果旧大学もまた改革されるであろうことを期待したのである。

これらの批判に対して両大学のなかから弁護の声はあった。1808年の「エジンバラ・レビュー」の批判に対するオリエル・カレッジ Oriel College のフェローであるコプルストン Edward Coplestone の弁明や、ハミルトン卿の非難に対するケンブリッジ、トリニティ・カレッジ Trinity College のチューター、ウエーベル William Whewell の解答は有名である。コプルストンは当時進められていた専攻課程の教育内容の改善を指摘して「レビュー」の非難が当らぬとし、また古典については「ギリシャ、ローマの文学の残されたものには人類の才智の精髄がある<sup>(17)</sup>」とし、その自由教育での意義を強調した。ウエーベルはカレッジにおけるチューター制度を、それが古典と数学の教育にもっとも適しているとして擁護し、チューター制度と講義制度の両者をもつ旧大学の制度を弁護した<sup>(18)</sup>。

1830年以降オクスフォード内におこったもっとも影響力ある運動は、いわゆるオクスフォード運動として知られる宗教運動であった。これは1833年にはじまりケブル John Keble, ニューマン John Henry Newman, プシイ Edward B. Pusey らを指導者とした。この運動は1845年のニューマンのローマ・カトリックへの改宗を頂点に大学内に大きな論争をまきお

こしたが、一方それは英国教会に新しい方向を与え、その精神的復興の機会を与えたのである。それは教会の教育に関する責任を強調し、一方においては知的見解において狭量であり、かつ反動的と評されたが、しかし他方大学の道徳的向上と責任感の強調を導いたのである。ニューマンの大学観は1852年の「大学の理想」*The Idea of a University* においてみられるが、彼はここにおいて当時オクスフォードに潜在していた理想をとりあげ、彼のカトリシズムの信仰によって形づくったのである。一口でいうならば、彼にとってすべての人間の知識は人間と神との関係において一つに帰着せしめらるべきものであり、大学は単なる知識の場ではなく、思想と行動の諸原理を与える場であった。そして大学は「普遍的知識を教える場である。つまりその目的は知識の発展よりも、その流布と拡張である。もしその目的が科学的哲学的発見にあるとしたら、なぜ大学が学生をもつべきなのであろうか」といったのである。<sup>(19)</sup> また諸学の統一の原理は教会によって与えられるので、大学の管理は教会の手におかるべきであった。ニューマンらの考えはオクスフォードのなかにかんがりの影響をもったばかりでなく、J. S. ミルの如き功利主義者の大学論においてすらニューマンの影響をみるのである。

更に注目すべきことは、オクスフォード運動のローマ・カトリックへの接近とその保守的反動化は、逆にオクスフォード大学のなかに、外部からのそれに呼応するところの自由主義的傾向を助長することとなったのである。その代表と考えられるがオクスフォード・リンコルン・カレッジの長となったパチソンである。彼は初期においてオクスフォード運動の強い影響をうけたが、後には全くニューマンとは逆の方向に進み、その自由主義的傾向の故に英国教会によって非正統的と批判をうけた。彼は普通課程の水準の低さを非難し、チューター制度よりも教授による講義の制度を主唱した。彼によれば「高等教育の効果の第一にして欠くべからざる条件は、全般的にひろがり支持されている知的活動にある。……教授者は諸原理を教えるのではなく、方法を手ほどきするのである。彼は自ら研究者であり、学

生に彼の途を共に歩むよう招くのである。」<sup>(20)</sup>このようにパチソンは大学の第一義的機能を研究にあると考え、大学の改革を求めたのである。

このような動きのうちにケンブリッジにおいて1848年と1849年にトリニティ、セント・ジョーンズ St. John's の両カレッジがそれぞれ新しい学則を採用し、1850年には大学の学則を改正する委員会が任命された。オクスフォードにおいても同じ1850年に試験制度の規則が改正される動きがあった。そしてパチソンの言葉を借りるならば「変革の興奮が各カレッジ中にひろがった。奇蹟をおこす大学の改革という言葉が語られていた。……われわれは大きな、広範な改革の心がまえができていた。ただいかにそれを<sup>(21)</sup>はじめるかを示し、それをする力を与えてくれさえすればよかったのだ」という雰囲気<sup>(21)</sup>が大学の内外を囲むうちに1840年代が過ぎていった。

## ( 2 )

1832年の議会改革はハミルトン卿をして議会の干与による旧大学の改革を期待せしめたことは既に述べた。そしてまた改革された議会に対して、非国教徒がオクスフォード、ケンブリッジ両大学に入りうるよう法による修正を求める諸願が各地から提出されたのである。なかでも1834年にはケンブリッジ大学の2人のハウスの長、9人の教授、11人のチューター、その他41人の大学評議員の署名になる諸願が上下両院と首相の下に提出され、大学における宗派的制限の除去を求めた。これに対する大学保守主義者たちの反撃も強く、例えばオクスフォードの約100名ばかりの教員たちと900名のコンボケーションのメンバーは、非国教徒を大学に入れることは青年の心をまどわし、恐るべき結果をもたらすといった趣旨の宣言文を発表した。1834年に議会に提出された非国教徒に対する制限を除去する法案は下院を三分の二の多数で通過したが、上院において反対され流れた。しかしハミルトン卿らの努力で1836年再びこの問題は両院においてとりあげられ、両大学の学則を研究すべき委員会の任命の動機がだされたが、それは政府および大学自身がこの問題を研究するという了解の下にとり下げら

れた。しかし事実には政府によっても大学によっても、改革者たちを満足させる手段は何もとられなかったのである。

こうして1830年40年代が過ぎたが、40年代の後半46年に自由主義者ラッセル卿 Lord John Russell の下にホイッグ内閣が組織された。彼はつとに国教会による初等教育制度に反対し、非宗教的な国民教育制度の支持者として知られ、国教会支配の旧大学に対しても何らかの手段をとることが予想されていた。1849年彼の下に、改革の進まない旧大学の事情を調査する勅命委員会の設置を求める覚書が、両大学のメンバーと英国学士院の会員の有志によって提出された。この覚書は議会内の自由主義者たちに支持された。同様な勅命委員会の任命を求める手紙がオクスフォード大学のコンボケーション会員のうちより提出された。結局大学内の保守派の反対にもかかわらず、1850年に二つの勅命委員会が任命され、それぞれ両大学の調査にかかった。ケンブリッジを訪れた委員たちは比較的好意的にむかえられたが、オクスフォードを訪れた委員たちは明らかな敵意をもってむかえられた。しかし自らオクスフォード大学のメンバーであった委員たちは、大学内の改革派に助けられて調査をすすめた。そしてこの委員会の報告書にもとづいて、1854年にオクスフォード大学法が1856年にはケンブリッジ大学法が成立し、両大学の改革がなされたのであった。しかしこの両大学法は両大学の中世的性格を完全に拭い去ることはなかった。それはその後の1871年大学審査法、1872年のカレッジ、大学の財政に関する委員会、1877年オクスフォード・ケンブリッジ大学法をはじめいくつかの学則変更などによって補われなければならなかった。しかしこれらの1854、56年の大学法は疑いもなく両大学の近代化の基礎をおいたのである。

新しい改革は次のような点においてなされた。第一に行政機関に関しては、オクスフォード大学では従来の卒業生の団体 Convocation の外に、現にオクスフォード大学の教職員であるものの会 Congregation をつくり従来の Hebdomadal Board はコングレゲーションによる公選メンバーを多数含む Hebdomadal Council に代えられた。ケンブリッジにおいてもほ

ば同様の改革が行われたが、これによって従来のカレッジの長たちによる大学の寡頭専制は破られた。これはまた大学のカレッジへの優越権を回復したが、それはさらに1877年の大学法およびその結果任命されたカレッジの学則に関する委員会の活動によって強化された。それによって大学は各カレッジから出される積立基金をもつことができるようになり、大学の教授、教員の席あるいは建築を増設することができるようになった。

また従来特定の家族、地域、学校と結びつけられていた各カレッジの学則は変えられ、それによってカレッジのフェロウシップ、スカラシップは能力や成績によって与えられることとなり、従来の学生間の貴族、紳士、平民という身分階層区分は廃止された。フェロウは数える義務をもち、またその給与に基準が与えられた。またフェロウが聖職でなければならない制約はとかれた。

宗派的制限に関しては1854、56年法によってバチェラーの学位に関しては宗教的審査をしないこととしたが、マスターに関しては依然として国教徒のみという制約が残っていた。しかし1871年の大学審査法によって神学を除くすべての学位が非国教徒にもひらかれることとなり、またカレッジ礼拝堂への礼拝強制は廃止された。1914年にはケンブリッジでの学位、フェロウシップに関するあらゆる宗教的制限がとかれ、1920年にはオクスフォードでも同様な手段がとられた。

これらの改革の結果は両大学のなかに新しい生命と活力を注いだ。学生の数は急激に増加し、1800年には741であったオクスフォードの学生数は1900年には約2,500となり、ケンブリッジにおいては387が約2,800となった。女子のカレッジやホールがつくられ、女子学生が大学に現れはじめたのもこの時期1870代のことであった。ただし女子学生が完全に男子と同じ地位を得たのはオクスフォードにおいては1926年、ケンブリッジでは実に1948年のことであった。<sup>(22)</sup> 女子のカレッジとともに英国教会、自由教会、ローマ・カトリックの各宗派的ホールまたはカレッジがつくられた。それらのうちホールについては、それらはカレッジとしての地位はもたなかったが、通

常カレッジに比べてはるかに低い生活費ですみ、比輕的貧困な学生のためにつくられたものもあった。教育内容に関しては新しい教科，なかでも自然科学系のものが多く加えられ，また新しい専攻課程が自然科学，法律，歴史，東洋語，英語，英文学，中世近代語などにつくられた。またカレッジのチューター制度も大いに改善された。

( 3 )

このようにしてオクスフォード，ケンブリッジの両中世大学は19世期後半から20世期にかけてその中世的性格から脱皮し近代的大学としての装いを身につけることができた。ギリスピイ Charles C. Gillispie はこの過程を次のように説明した。「多くの英国の機構のように，古い大学はできるかぎりその形と精神を保持しながら，しかもできるかぎりその内容と機能を変化させることで近代化された。<sup>(23)</sup>」これはイギリスの大学制度のなかでどのような特質と意義をもつであろうか。まづその理念に関しては，近代化されたオクスフォードとケンブリッジは，一方においてロンドン大学に支配的であったりべラルな理念に強く影響をうけつつも，なお伝統的な，モベリイ卿のいわゆる「キリスト教＝古典主義的」な理念を強く保持し，またそれを更に精巧な理念につくりあげたのである。その代表はすでに述べたニューマンの「大学の理想」である。彼と運動をともにしたプシイも次のように述べた。「大学の目的は知性の訓練をもってできるかぎり道徳的知的全人を訓練することである。大学の問題と仕事はいかに科学を進歩させるかということだけでなく……医学，法律，あるいは神学の研究をすることもなく，神がその恩寵によって命じた義務を正しく遂行する精神を宗教的，道徳的知的につくりあげることである。<sup>(25)</sup>」この全人的教養の場としての大学という理念は，その後の大学における専門分化の進展——それはオクスフォード，ケンブリッジ両大学もそれからまぬがれることのできなかつたりべラルな理念にるよものであるが——にもかかわらず，依然としてオクスフォード，ケンブリッジ両大学の重要な理念として保持されたばかり



でなく、例えば J・S・ミルの如き人を通して英国の大学全においてすら、  
ったのである。その後の新大学において、またロンドン大学に特に影響も  
常にリベラル・エデュケーションが重視され人間をつくることの重要性が  
強調されているのは、実にこの19世紀に改革されたオクスフォード、ケン  
ブリッジの伝統によるものといえよう。

この全人的教養の理念が単に伝統的なオクスフォード、ケンブリッジ両  
大学にとどまらず、ロンドン大学をはじめ新しい地方的大学にも影響をも  
った理由の一つは、この自由教育が実はウエーベルも述べたように「大学の  
主な義務はよい市民をつくりだすところにある。それは諸実務や学術的  
職業における将来のリーダーとなるべきエリートを訓練すべきである<sup>(26)</sup>」と  
いうある意味では極めて実際的な目的と結びついていたところにある。も  
ともと18世紀までの旧大学は、支配階級と緊密に結ぶことで国家的指導層  
をつくるナショナルな機関としての意義をもっていた。そして19世紀の大学  
改革の結果、例えばオクスフォードの伝統主義者であるフリーマン F.  
A. Freeman すら「大学は英国の偉大な中産階級に影響を及ぼすよう努める  
であろうか。もし大学がこの最も重要な階級にその便益を及ぼそうと試み  
ないとしたら、偉大な国家的機関として、また国家的知性の指導と養成を  
まかされた団体としての使命を、大学は果すことができないであろう<sup>(27)</sup>」と  
述べたように、改革されたオクスフォード、ケンブリッジは新しい市民的  
指導層の教育機関としての機能を自覚するにいたった。そしてその成功は  
アスキス、グラッドストーン、グレイなどはじめとするヴィクトリア期イ  
ギリスの指導者たちをつくりだすことによって客観的に認められたのであ  
る。確かに両大学の中世的性格から近代的性格への脱皮には時を要したし、  
また大学内の保守主義の抵抗をうけた。そしてまたその開放が市民階級に  
とどまって労働階級に及ばなかったことも事実である<sup>(28)</sup>。しかし当時の社会  
制度全体を背景において考えるならば、1870年以降に大学セツルメントを  
はじめ、拡張大学運動や労働者のためのラスキン・カレッジ、労働者教育協  
会などが、このオクスフォード、ケンブリッジ両大学の教師たちの指導の

下にすすめられたことは、両大学のもつ国家的責任感が決してたんに狭い階級的なものに限られていないこと、少くとも限られない可能性をみることができよう。そしてこのような国家的責任に対する態度は、ロンドンをはじめ他の地方的市民大学に対して大きな影響力と指導力をもったと考えられるのである。

次に考えられるのは教育内容である。全人的教育と国家的リーダーシップの養成を強調するオクスフォード、ケンブリッジにおいて、カレッジ制度とその試験制度はその目的にもっとも適していると考えられている。カレッジ制度の意義はウエーベルらによって強調され、ハミルトン卿らの講義制度を主張する人々も敢てその価値を否定はしなかった。カレッジにおけるチューター制度による個人的指導や、カレッジの共同的生活からもたらされる人格的道徳的訓練は、大学の講義室での知的訓練にはるかに勝って重要であると考えられている。「知的にすぐれた非寄宿制の大学より、知的に劣<sup>(29)</sup>っても寄宿制の大学をえらぶ」といったニューマンの考えは、オクスフォード、ケンブリッジ両大学の強い伝統であり、またこれは大学の講義を主体としたロンドンをはじめ他の地方大学にも影響をもった。それはそれらの大学でのチューター制度の採用、寮の設置などのうちにみることができるのである。またその試験制度について普通課程と専攻課程の区分は、一方においてはひろい一般教育を、他方では高度な専門教育を学部学生に対して与えることを可能にしている。普通課程では例えばオクスフォードの場合一年の終りに **First Public Examination** と呼ぶ一種の予備試験をうけた後、三年の終りに **Sacond Public Examination** として多くの学科の中から三つを選んで合格する必要があるように、比輕的広い分野について学ぶことができる。専攻課程は一つの学科に関して深い専門的研究を要求するか、しかし例えばオクスフォードの **Greats** と呼ばれる古典の課程についてみると、これは実質的には歴史と哲学を結びつけた課程であって、きわめて広い研究を要求し、やはり一種の教養的課程とも考えられるのである。これはかなり複雑な両大学の課程の一例であるが、こうした一般教養

に強調点をおき、なお専門的教育にも配慮をおく課程のたて方はやはり後の新しい大学の範とするところとなっている。

最後に大学の行政機構の問題であるが、改革によって両大学における国教会的なカレッジの寡頭支配は破られた。そしてそれに代って大学卒業生、なかでも大学教職員による公選機関が大学の主要行政機関となったのである。大学の行政がこのように全く大学関係者のみの手で行われることは、外部からの代表をその行政機関に加える他の新大学とは異なる一つの特長である。もちろんこのことは新大学が外的な権威の下にあるということの意味しない。自治的機関であることにおいては新大学もかわりがない。しかしそれを可能にしている理由の少くともその一つは、長い歴史を通して全く自治団体として存続してきたオクスフォード、ケンブリッジ両大学の伝統であろう。アーネスト・バーカー卿 Sir Earnest Barker はイギリスの民主主義およびその民主的教育におけるこの自治的団体としての大学の存在意識を強調している。<sup>(30)</sup> しかも自治団体の陥りやすい保守主義の危険は議会による干与という方法をつくり出すことによって防がれたのである。この民主的議会による干与が臨時的性格の調査委員会の任命、法律による学則変更にとどまったことは注目すべきである。すなわち議会の干与といえども、それはあくまでも改革の形式ないし契機を与えたものにすぎないのであって、改革の遂行とその責任は大学そのものにあつたのである。これは大学と国家的要請との間に間隙が生じた場合、前者の自治を害うことなく、しかも後者の意志を前者の改革に反映せしめうる巧妙な手段というべきである。この方法は後にもしばしばイギリスの大学改革の方法としてとられるのである。

### 3. 地方大学の成立

#### ( 1 )

19世紀の後半、大英帝国の首都ロンドンにおいて巨大な連合大学が成長し、また中世的都市オクスフォード、ケンブリッジにその中世的大学に改革

の歩みがみられていた間、これらの都市以外の地方都市、なかでも北部中部の新興都市に第三の大学ともいべき新たな型の大学——通常市民大学 *civil universities* あるいは地方大学 *provincial universities* と呼ばれ、あるいはその建築物の故に赤煉瓦大学 *red brick universities* と呼ばれる——が胎動しつつあった。これより以前、南部に偏在していた大学に対して北部に大学を設置しようとした考えがなかったわけではない。16世紀エリザベス女王治下においてヨークシャーに国教的大学の設置計画があり、また17世紀の長期議会に対してマンチェスターおよびヨークに大学を設置すべきことを求める請願がだされ、クロムウェル共和政府はダラムに大学を設置しかけさえしたのであった。このダラム大学の計画は19世紀に入り、しかし英国教会の指導権の下に実現された。すなわち1832年議会立法によってダラム大学 *University of Durham* が、英国教会ダラム主教区に設置されたのである。1836年に勅許状を得たこの大学は、改革前のオクスフォード、ケンブリッジに範をとり、普通の学生に文科理科の教育を与えたが、なお英国教会の牧師の訓練を第一の目的とし、学生はダラム主教区本山教会敷地内のカレッジに、オクスフォードなどのカレッジより安い費用で起居することになっていた。

しかし19世紀の後半に胎動していた新大学はこれらの大学とはその動機において、またその構造において全く異なるものがあつた。それは産業革命による新興都市とそれによる新興ブルジョア階級の発展を背景にした新興大学であつた。産業革命は英国社会の様相を農村的社会から都市的社会へと一変したが、なかでも著しい変化は従来南部に偏在していた人口と富が北部および中部に移動したことであつた。1760年には750万あつたイングランドの人口は1820年に1400万に増加してはいたが、その多くは北部中部の炭坑を中心として発達した工場都市に集中したのである。1760年頃には人口約70万のロンドンがイングランド最大の都市で、これにつぐ都市としては人口5万程度のブリストルとノーリッチであつたが、19世紀の初期には早くもリヴァプール、マンチェスター、バーミンガム、シェフィールドら

の中部都市がロンドンにつぐ都市として成長していたのである。そしてこれら都市において実権を握っていたのが新たな産業的中産階級であった。彼らは1830年代の議会改革および地方自治制の改革を通して旧地主的支配層に代り、政治的経済的自由主義の時代にイギリスを導いたのであった。19世紀の前期および中期に、彼らが新しい市民的ロンドン大学の成立を支持し、また英国教会と保守的支配層の独占下にあって沈滞していたオクスフォード、ケンブリッジ両大学の改革を求めたことは既に考察した。

ところが19世紀の後期いわゆる帝国主義の時代に入ると、彼らは新しい事態に直面することとなったのである。まづ第一は経済的国際競走の激化であった。いち早く産業革命を成就し「世界の工場」としての独占的優越の地位を久しく占めていたイギリスも、19世紀後半とくに1870年以降はドイツ、アメリカ等の新興国との競走において次第にその地位をおびやかされるにいたった。これらの新しい国が新技術を採用し、化学・電気などの新工業部門を発展せしめ、企業結合を進め、保護関税政策をとったのに対して、イギリスでは技術が旧式化し、新工業部門の発達がおくれ、また企業結合が進まず、自由貿易の惰性が強く支配していたからである。この結果イギリスの好況時代は終熄し、いわゆる大不況の時期に入った。そして労資の対立が激化し、ここに第二の社会問題の深刻化という事態を生じたのである。

もちろん社会問題は今に始ったことではなく、産業革命によって社会的に資本家と労働者との分化が行われて以来のことであった。産業革命の進展は一方において資本家階級をますます富ましめ、ついに旧地主的支配層にかわって実権をとるにいたらしめたが、他方労働者階級は必ずしも彼らの富の恩恵を被ることなく、ながらく苛酷な労働条件と低賃金、悲惨な生活状態のなかに残されていた。その結果19世紀の始めにははやくも組織的な労働運動がおこり、1824年の結社禁止法の廃止以来多くの合法的な労働組合がつくられることとなった。労働者たちは組合によって労働条件や経済的条件の改善に努めたばかりでなく、また議会改革を求めて政治運動を

行った。1848年のチャーチスト運動の失敗後は、あたかもイギリス資本主義の黄金時代をむかえ労働階級の生活も相対的に改善されたこととあいまって労働運動は穏健化し、現存資本主義体制の中で労働と経済条件の改善をめざす労働組合主義の方向にむかった。そして労働運動は自由主義急進主義の一部となり、1867年の選挙法改正によって国政に直接影響力をもつまでにいたった。しかし19世紀の後期に入りイギリス経済が不況におちいり、上述のように労資間の対立が甚だしくなると再び労働者の階級意識はたかまり、彼らの自由党との協力という態度には変りはなかったが、しかし独自の労働者の社会主義政党が1880年代に生れるにいたった。

1870年以降の諸社会立法、議会改革、行政制度確立その他の諸施策はこのような情勢の下に行われたものであった。それによって支配的な産業ブルジョアジーは、一方においては激化する国際的経済競走に、他方では高揚しつつあった労働運動に対処しようとしたのである。19世紀後期の諸教育政策や教育運動はこの一かんとして理解することができる。「われわれの親方たちを教育しなければならない<sup>(31)</sup>」としてつくられた1870年初等教育法は、1867年の労働者への選挙権の拡大と切りはなせないし、1871年の技術教育に関する勅命委員会の任命をはじめとする技術教育政策は、国際的経済競走への対策であった。またこの時期の労働者カレッジ Working Men's College や職工協会 Artisan's Institute のような成人教育または技術教育運動も、労働運動と離しては理解できない。大学教育に関して、オクスフォード、ケンブリッジ両大学の改革もこの段階ではたんに既得権益を中産階級にあづからしめるにとどまらず、一步進んでこれを全く中産階級のものとすべき改革に進んでおり、さらに大学拡張運動のなかには労働階級も含んだ国民への大学の責任という動機がみられたことはすでに述べた。ロンドン大学についても、この時期に多くのカレッジの設置やそれによる大学の内容の充実がみられた。そしてこれから考察しようとする地方大学もまたこのような時代的背景をもって生れてきたのである。

## ( 2 )

もちろん19世紀の後期にそれらの地方大学が急に生れたのではない。前に述べたような地方都市の発達の過程において、それらの都市に後の大学の前身ともいふべきいくつかの教育運動ないし教育施設がつくられていたのである。第一にあげられるのは科学教育活動である。17、18世紀の科学の進歩の著しかった時代に、中央では **Royal Society (1663創立)**, **Royal Institute (1799)**, **Society of Arts (1754)** などの各種科学団体があったが、これらと呼応する地方的科学運動が18世紀に入ると地方都市においても盛んになった。例えばマンチェスターにおいては1718年にはやくも **Mathematical Society** がつくられ、著名な数学者による公開講座が開かれている。同様な集会はニューカッスル、バーミンガム、リーズ、マンチェスターらの諸都市にもつくられ、そこでは野心的な企業家たちが科学者や技師たちと意見を交し、あるいは実験や新しい仕事を企てた。これらの **Literary and Philosophical Society** と呼ぶ科学協会は、また講演会、博物館、図書館、実験室、科学雑誌などを通じて地方的な教育活動を行ったが、19世紀に入るとそれぞれ各地において大学設置の声をあげ、あるいはそれに先立って学芸科学学校 **College of Arts and Science** をつくり、<sup>(32)</sup> ニューカッスル、リーズの如くそれを新しい大学の基礎としたのである。

科学運動とならんで地方大学の設置に重要な役を演じたものに地方都市における医学教育機関がある。18世紀の医学の進歩と医師の体系的な職業的訓練の必要は、18世紀半ば以降19世紀前期にかけてロンドンをはじめ各地方都市に病院附設の医学校を設置せしめた。これらのうちリバプール、バーミンガム、リーズ、ニューカッスル、シエフィールド、ブリストルなどの各医学校は、その地の大学の設置運動に大きい役割を演じ、自らその医学部となり、新大学の成立発展を助けたのである。

また19世紀のロンドンおよびその他の地方都市に発達した成人教育機関も地方大学の成立に大きい役を演じた。なかでもリーズ、シエフィールド

の Mechanics Institute や、シエフィールドの People's College、マンチェスターの Working Men's College はそれぞれその構成団体の一部となって大学の成立に役割を果たした。また1873年にケンブリッジ大学によって、また1878年にオクスフォード大学によって始められた大学拡張運動は、シエフィールド、リーズ、レディング、ノッチンガム、エクセターなどの大学の成立に重要な役を果たした。これらの成人教育機関は前述の科学教育運動や医学校が中流階級、専門職階層を対象にしたのに対して、中流階級ばかりでなく下層中流階級や労働者階級、なかでもその上層を対象に含んだ。このことは後の地方大学の成立に際して、従来の大学よりもより幅の広い社会層を学生とするのに貢献したのである。<sup>(33)</sup>

これらの運動や活動はかなりの効果を収めたが、それらはそれぞれ特定の階層なり職業の狭い必要に応じてつくられており、その間に総合的な計画性はなかった。このような事情において、これらの地方都市の市民の間に総合的な大学の設置を望む声が出たのは容易に理解されることである。事実リーズ、マンチェスター、ニューカッスルなどの都市では1820、30年代に大学設置の動きがあったが、いずれも成功しなかった。結局19世紀の後半に一番早くから地方大学設立への動きをとったのはマンチェスターであった。綿紡糸の貿易で産をなした市の富裕商人ジョン・オウエンス John Owens は9万7000ポンドの遺産を、神学を除く「英国の大学で通常教えらるであろう学術および科学の諸分野」を進歩させるために残し、それを基金にして1851年オウエンス・カレッジ Owens College がつくられた。このカレッジはいくつかの注目すべき特長をもった。第一にそれはスコットランドの大学組織にならい古典、数学および自然科学、哲学（英語、英文学を含む）の三学科にわかれた。第二にそれは例えばロンドンのユニバーシティ・カレッジのように神学の教授を除外することはなかったが、しかしまたそれをオクスフォードらのように学生に強制することはなかった。オウエンスも彼の遺産保管者たちも穏健な国教徒であって、大学における宗教教育の問題をこのように解決したのである。第三にオウエンス



はこのカレッジの入学者を第一義的にはマンチェスターおよびその近隣の子弟と考えたが、しかしこのカレッジが「誕生の場所にかかわらず、また社会的地位や条件にかかわらず、すべての志望者に開かれる」べきだと考え、<sup>(35)</sup>決して狭いローカルなものに限定する意志はなかった。最後にそれは全く私的な個人の行為によってつくられたものであった。国庫補助は1890年までなかったし、マンチェスター市の補助は1892年までなかった。全くそれは一市民の手によって出発したカレッジであった。なお学生はロンドン大学の学位をとることとなっていた。

こうして出発したオウエンス・カレッジも学生は余り集まらず、1850年代の終りにはこのカレッジは失敗であるとの声が高かった。失敗の第一の理由は大学レベルの教育志望者の絶対数の少いことであった。当時まだ公的な初等中等教育制度は整っておらず、わづかに私立の中等学校を終えるものはオクスフォードらの既存の大学に進み、新たにこのカレッジに入る資格をもったものは少なかった。したがってこのカレッジを中等教育機関、あるいは技術教育機関に格下げしようという声が強かったのも無理はなかった。第二の理由は中産階級の関心がまだ十分に熱していないことであった。そのためにはもう少し時期を待たなければならなかったのである。そしてその機会は先にのべた1870年以後の新事態、なかでもイギリス産業の外国からのおくれの自覚によって与えられたのである。

1851年のロンドンの大博覧会はイギリス産業の優越を示すことができたが、しかし産業の競走が実は産業教育の競走であることを当事者に気づかしめるに十分の効果があった。翌々1853年政府に学芸科学局が設置され、その下で技術教育の改善進歩をはかることとなった。しかし何といてもイギリスの朝野を驚愕せしめたのは1867年のパリ大博覧会であった。そこで見られたのは外国、特にドイツにおける技術の進歩と技術教育の効果の著しさであった。それに反しイギリスの展示物は「さびついた鉄片とまぜこぜになってだらしくくっつけられた原料の堆積」などと酷評され、<sup>(36)</sup>イギリスの産業技術のおくれの事実はおおうべくもなかった。ここにおいて

産業技術のおくれは社会一般の関心となり、大学レベルを含んだあらゆるレベルの科学技術教育が問題となったのである。

このようななかにあつて、1859、1865の両年政府より派遣されて大陸諸国の教育制度を視察したマシウ・アーノルド Mathew Arnold は1868年のレポートにおいて、この時代的要求に対してオクスフォード、ケンブリッジ両大学の不適當なことを指摘し、進んで地方都市に新しい大学を設置することをすすめた。すなわち彼の言葉によれば「われわれは多くの学生をオクスフォードかケンブリッジに入れ、三年、二年あるいは一年、もしくは一月でもそこで学ばせようといった考えを、すべて頭の中から取り去ってしまわなければならない。それらの大学は彼らの環境に適さないばかりか、彼らの愆する教育をも与えることができないのである。われわれは八つか十の主要な人口中心地に大学をつくり、学生に彼らや彼らの親の選ぶ生活のための用意のある家庭から通学させて講義をきかさせよう。人口の集中地を仕事のための場所であるとともに、このようにして知的なセンターとすることは何よりも大事なことである。なぜならストラスブルグやリオンが真のヨーロッパの都市となっているのに、リバプールやリーズは、これが欠けているばかりに、たんなる大きくなり過ぎた地方都市にとどま<sup>(37)</sup>っているのである。」

### ( 3 )

この時代の要請に対する反応は直ちに地方都市のなかにおこった。ヨークシャー綿工業の中心地リーズにおいては、1867年のパリ大博覧会を訪れ、いたく刺激された繊維企業家たちによって、1869年に機械と染色、繊維に関する科学技術学校 The Leeds Art and Science Institution がつくられたが、同年市議会において同市内に科学のカレッジがつくられるべきであるという決議が採択され、2万5000ポンドの基金が集められ、1874年にヨークシャー・カレッジ・オブ・サイエンス Yorkshire College of Science が設立されるにいたった。数学および実験物理、地質および採鉱、化学の三人

の教授が任命され、145人の夜間部学生を含む326人の生徒が入学した。1877年にはある繊維会社の寄附によって繊維工業学科がつくられ、より一層地方の要求に応えることとなった。

同様な動きは炭鉱および機械工業都市のニューカッスルにもおこった。1870年ダラム大学は医学校を合併したが、翌年大学はニューカッスルの企業家や科学協会、資産家たちと協同し、それらの財政的支援によってニューカッスルに科学教育のカレッジ **Newcastle College of Physical Science** をつくった。1880年には土地の炭鉱所有者たちによって採鉱の教授の席がおかれるいたった。金物工業都市バーミンガムにおいても、企業家メイソン **J. Mason** は私財20万ポンドを提供して、「あらゆる階級の人々が容易に利用できるような条件で……この町と地域の必要に応ずる大規模な科学教育の施設を備える」<sup>(38)</sup> ために科学のカレッジ **Mason Science College** をつくった。マンチェスターのオウエンス・カレッジもこの頃より再び科学教育の面において活発となった。またロンドンにおいてユニバーシティ、キングス両カレッジが科学教育において知られるようになったのもこの時期であった。

このような科学カレッジの興隆は一面からみれば地方企業家たちの熱意によるものではあったが、他面この頃より次第に表面にあらわれてきた下層中産階級、労働階級上層の教育的要求にも基くものであった。そして彼らの要求は19世紀半ば以降次第に整備された初等中等教育制度の発達によって助けられたのである。それによって従来よりはるかに広い社会層のものが高等教育をめざすようになった。また初等中等教育制度の樹立は多数の教師を必要とし、<sup>(40)</sup> またとくに高等な教育をうけた女子の教師を必要とした。これらの新しい学生層は一方においては高級な科学技術教育に関心を示し、これらの新しい科学カレッジに入ったが、しかし彼らの関心はたんにそこにとどまらず、さらに広く人間教養の全般に関心をもち、これがこれらの科学カレッジを従来の大学に一步近づいた総合的なカレッジに進めることとなったのである。

そのよい例がオウエンス・カレッジであった。既に述べたように、カレッジは60年代に入りその科学教育を活発にしたが、これより先1857年にこのカレッジに密接な関係をもつ労働者カレッジ Manchester Working Men's College がつくられ、労働者に対する一般教養的性格をもった教育が行われた。<sup>(41)</sup>これは労働者ばかりでなく下層中産階級に属する事務員商人などをひきつけていた。またオウエンス・カレッジでは1852年より小学校教師のための古典、数学の夜間のクラスをつくった。この夜間クラスは1861年に労働者カレッジを吸収し、1867年までには「文芸ならびに科学の学位のための高い一般教養と専門的商業的生活に必要な特別な訓練を与える」<sup>(42)</sup>と目的を明示するまでにいたった。学位はロンドン大学の「学外学位」をとるようになっていた。1871年には女子を正規の学生として認めた。1873年にはマンチェスターの医学校を吸収し、学生数は1000人に上った。ここにおいて大学当局は独立の大学としての勅許状を求めたが、1880年ビクトリア大学ができるとその構成カレッジとなった。マンチェスター大学となったのは1903年のことであった。

同様に科学のカレッジを総合的なカレッジにしようとする動きはリーズ、バーミンガムにあり、またブリストル、シェフィールド、リバプールなどでは始めから科学とともに人文的教養科目を備えたカレッジとして出発した。その際貢献したのが19世紀後半以降改革され新しい責任感に燃えていたオクスフォード、ケンブリッジ両大学であり、なかでもその大学拡張運動であった。ケンブリッジ、トリニティ・カレッジのシュアート James Stuart によって始められたこの運動は、地方の労働階級に対して（実際はより多く中産階級のものとなったが）大学で教えられると同じ内容の教育を同じ方法、すなわちチューター制度によって与えようとするものであった。この運動は地方都市の当局、中産階級の成人教育団体、婦人教育団体、協同組合などによって助けられ、1873年にはダービー、レスター、ノッチングム、リーズなどの都市に講座を開いた。1876年にはロンドン、1877年にはオクスフォードの両大学も拡張講座を開いた。すでにのべたリーズの科学カ

レジ **Yorkshire College of Science** は、1877年リーズにおかれていたケンブリッジの大学拡張講座を吸収して文科系の学科をおき、科学のカレッジからの一歩を踏み出し、同時にその名称をヨークシャー・カレッジとした。1888年ビクトリア大学ができるとその構成カレッジとなり、1904年に独立のリーズ大学となった。

ブリストル大学の設置もオクスフォードの大学拡張運動が契機となった。すなわち当地の拡張講座の成功は、同じく市に科学技術に関するカレッジをおきたいという市民の要求とあいまって、大学設立の気運をつくりだした。そしてそれがオクスフォードのベリオル、ニューの両カレッジと、当地に前からあった医学校と博物館の協力を得て、1876年にブリストル・ユニバーシティ・カレッジ **Bristol University College** をつくりあげたのである。その創立に際して述べられた次の言葉は、このカレッジの動機を明確にあらわしているばかりでなく、この時期につくられた他のカレッジの性格もよく代表しているといえよう。すなわち「イギリスの産業の繁栄は将来この国の商工業をになってゆく人々の正当な科学的技術的訓練に依存しなければならぬと一般に認められている。……同時に大学教育の主要部分をなす全科目の教養がより広く与えられなければならないということも信じられつつある。」<sup>(43)</sup>このようにしてその教育は狭い技術教育にかぎられないで、数学、機械、物理、地質、経済、繊維の外に古典、論理、ヘブライ語、法律などを含んだ。ブリストル大学は1909年に勅許状を得た。

このように新しくつくられる地方大学には、次第に当初から狭い科学技術教育に限定せず広い教育内容を備える傾向がみられた。1881年につくられたリバプール・ユニバーシティ・カレッジ **Liverpool University College** は、たまたまりバプールが市に昇格した時期に当って計画され、新たな誇りにもえた市当局および市民の支持によって土地と5万ポンドの基金が得られてつくられたものであった。それは当初から「市ならびに近郊の住民に、学外学生に学位を与える大学の文理その他の学科に関する学位を得さしめるような自由教育のすべての分野の教育を用意し、また同時に専門的

商業的生活に直ちに役立つような技術教育を与える」目的をもっていた。<sup>(44)</sup>  
1884年にはリバプールの古い医学校が合併し、また同年カレッジはビクトリア大学の構成カレッジとなった。カレッジは1903年大学の勅許状を得た。

これらの新しいカレッジは当初ロンドン大学の「学外学位」をその学生にうけさせることによって、教育水準の向上と、また同時に大学レベルの高等教育機関としての対外的な信用を得ていた。しかし既に述べたように、「学外学位」試験はこれらのカレッジの教授たちの干渉することのできないものであったから、カレッジが陣容を整えてくるにつれて独自の学位授与権を求めたことは当然であった。1880年にマンチェスターにビクトリア大学 **Victoria University** ができたのはその要求に応えたものであった。これには当時まだそれ自身では独立の大学となる資格の備っていないオウエンス・カレッジ、ヨークシャー・カレッジ、リバプール・ユニバーシティ・カレッジが構成カレッジとなった。各カレッジの教授たちはビクトリア大学によって協同して各カレッジの学位試験を行い、それによって個々の各カレッジだけでは得られない教育水準と社会的信用を保つことができた。しかしこれにはもともと運営上の困難があった。そしてさらに致命的であったのは、この大学は自身の大学をもちたいという各カレッジ所在地の市民たちの気持を満足させることができなかったのである。したがって1900年バーミンガムのメイソン・カレッジが独立の大学としての勅許状をうけることに成功すると、ビクトリア大学構成各カレッジもこれにならい、それぞれマンチェスター (1903)、リバプール (1903)、リーズ (1904) の大学となり、ビクトリア大学は解消した。

バーミンガム大学の設立は市民的支持による大学設立のよい例である。メイソン・サイエンス・カレッジは1881年に文科系の教育も含むメイソン・カレッジとなり、学生はロンドン大学の「学外学位」またはビクトリア大学の学位をとることとなっていた。しかし19世紀後期自由主義の牙城であり、例えば1870年初等教育法設立に際しては「国民教育同盟」をつくり活躍したこの都市の市民的矜持は、他に追随することを潔よしとしなかった。

そしてその代表であるチェンバレン J. Chamberlen の下に多額の抛金をし、1900年に大学の勅許状を得るのに成功したのである。大学は文、理、医（元医学校）学部の外に、この商業都市にふさわしく新しく商学部をおいた。このカレッジおよび大学の初代の総長となったチェンバレンが述べた次の言葉はバーミンガム市民の抱負を語っている。「偉大な工業的産業的住民の真中に大学をおくことは、工業や商業に従事している人々に可能であると思われる以上の高い諸目的や高い知的野心をもって、全大衆に影響を与えるために何かすることになるのだ。」<sup>(45)</sup>「国家間の大学の競走は建艦競走程に強いききめのあるものである。われわれの大学の状態が高度な国家的関心となるのはこの理由による。」<sup>(46)</sup>

なおこの外大学拡張運動が中核となってできた大学にはまたシェフィールドがある。当地には1842年より People's College があったが、これが1879年たちゆかなくなった時、当地の富裕な鋼鉄企業家ファース Mark Firth がケンブリッジの大学拡張運動のためのカレッジを寄附した。ファース・カレッジと名づけられたこのカレッジに、医学校と技術学校がつけ加えられ、1897年ユニバーシティ・カレッジとなり、さらに1905年シェフィールド大学 University of Sheffield となったのである。<sup>(47)</sup>

レディング Reading もまたオクスフォードの大学拡張カレッジから始った。1892年にこのカレッジは、政府の科学工芸局の補助金によって運営されていた地方の科学学校を吸収して、文理のユニバーシティ・カレッジとして出発した。カレッジは地方の企業家の財政的援助を得て大学になろうとしたが、これが農学部を加えて大学として認められたのは1929年のことであった。

ノッチンガム Nottingham も同じく1873年に始められたケンブリッジの大学拡張運動から始められた。ここでは市当局が地方税によってこれを支持した所に特徴がある。すなわち1万ポンドの無名の寄附と、10万ポンドの市の支出によって1881年につくられたユニバーシティ・カレッジは、ペニ半地方税によって維持されたのである。しかしこれが完全な大学とし

て成長するにはなお時を要し、結局1948年まで待たなければならなかった。

なおこれらのユニバーシティ・カレッジの動向と関連して、ダラム大学の改革と、ウェルズ大学の創設があった。ダラム大学は1836年の創設以来中世大学の伝統にもとづいていた。しかし1852年まづニューカッスルの医学校が大学の一部となり、つづいて1874年にニューカッスルの **College of Physical Science** が大学の一部となり、これが1904年には文科を附設してアームストロング・カレッジ **Armstrong College** と改称され、大学の強力な一構成カレッジとなるに及んで、ダラム大学も近代的産業世界と密接な関連をもつようになったのである。ウェルズにおいては1828年英国教会の主教の手によってセンド・ディヴィツ・カレッジ **St. David's College** がつくられてあった。これに対する非国教徒ウェルズ人によるウェルズ大学設置運動が、1872年アベリストゥイス **Aberystwyth** にユニバーシティ・カレッジを設置せしめた。これについて80年代に南ウェルズのカーディフ **Cardiff**、北ウェルズのバンゴール **Bangor** にそれぞれユニバーシティ・カレッジができた。これらのカレッジはそれぞれロンドン大学の「学外学位」を目指していたが、1893年に連合大学としてのウェルズ大学ができると、その構成カレッジとなったのである。なお1902年にスワンシー **Swansea** にカレッジができ、ウェルズ大学の一部となった。

#### ( 4 )

こうして19世期の後半より20世期の初期にかけて10の新しい大学ないしユニバーシティ・カレッジが成立し、従来のオクスフォード、ケンブリッジ両大学、あるいはロンドン大学とも異った大学の類型をイギリスの大学制度の中に導いたのである。それがどのような特長をもち、その後のイギリスの大学制度の発展にどのような意味をもったかについて整理してみよう。第一にはそれらの大学が、オクスフォード、ケンブリッジのような中世都市でもなく、またロンドンのような首都でもない、主として産業革命以後発達した地方的産業都市に、それもそれらの都市において実権を握っ



ていた産業階級の手によってつくられたことである。オクスフォード、ケンブリッジ両大学のようにイギリスの保守的支配層の全体と結びついた、あるいはロンドン大学のようにそれらに対抗して新興階級全体の支持によってつくられたナショナルな大学とは異って、これらの大学はあくまでもそれらの都市における地域的な関心によってつくられ維持されたローカルな大学であった。それがこれらの大学の第一の特長であり、これはその行政、組織、教育内容、学生などの特長のうちにあらわれているのである。ここにこれらの大学が地方大学 **local or provincial universities** と呼ばれるゆえんがある。ただし注意すべきことは、これらの大学がローカルという言葉がしばしば持つような意味での狭い地域的な大学であることは必ずしも意味しないことである。矛盾するようではあるが、これらの地方大学はオクスフォード、ケンブリッジ、ロンドンらと同様やはりナショナルなものでもある。それは一つにはオクスフォードらによってつくられてきたナショナルな大学の伝統が、これらの大学にも引継がれたということがある。しかしさらにそれらの大学につくられた19世期の後半、いわゆるイギリスの自由主義経済時代においては、それらの産業的地方都市がナショナルな利益または関心の中心地であった事実も、またそれらの大学に広いナショナルな責任と機能をもたらしたためである。先に引用したアーノルドやチェンバレンの言葉の中にも明らかにナショナルな機関としての地方大学という考えがあったのである。この意味で地方大学は地方当局の経営するいわゆるコミュニティ・カレッジ、カウンティ・カレッジ、あるいはテクニカル・カレッジとは異なる。多くの地方大学が地方当局から援助を得、ノッチングガムの如きは地方税による維持すらはかられたにもかかわらず、ついに市立大学 **municipal universities** といった考えがでなかったのも地方大学のナショナルな性格によると考えられよう。

こうした地方大学の性格から来る大学の行政上の特徴はその行政機関の構成である。最高機関は **Court** であり、そこには大学総長、副総長、学部長、教授の代表の外、地域の国会議員、学術研究団体や他大学の代表、

一定以上の金額の寄附者，地域の中等学校その他の校長，市長，主教をはじめ地域の宗教的指導者，医師や法律家団体の代表，代表的企業家，地方議会の代表など大多数は大学外の人々が加わっている。コートの執行機関である Council においても同様で，大多数は学外の人である。大学の学術教育内容に関しては教授会としての Senate があり，これはカウンスル，コートに代表を送ることができるが，一般にいて教授会の財政的行政事項に対する発言権はオクスフォードなどにおけるような強さはない。<sup>(48)</sup>

次には学科あるいは学部構成であるが，地方大学はその地方の特殊な産業的要求に基づいてつくられたため，学部構成に関してもその土地の特性を反映している。大学設置の際のバーミンガムの商業，リーズの繊維工学などは特に著名であるが，その後の発展の過程において各大学とも独特の優れた分野をつくりあげていった。もちろんその学科内容は自然科学や応用科学，あるいは職業訓練的色彩のもつばかりではない。文科系の学科や自由教育が，とくに時代を下るにつれて重要視されたことはすでに述べた。それらの「自由教育」という言葉のうちに，オクスフォードらのもたらした古典的伝統の影響をみることができであろう。それにもかかわらず，全体として地方大学における技術応用科学面の重視，ないし実利主義的な色彩の濃厚さは否定しがたい。19世紀の前半に創立されたロンドン大学が，ベルリン大学を代表とするドイツの人文主義的大学の影響を受けたのに対して，この世紀の後半の地方大学が，19世紀の後半以降発足したドイツの工業大学やアメリカの州立大学の影響を受けたことは，地方大学のこのような性格を一層強めた。それは一方において大学の社会奉仕的機能を強調するとともに，他方では科学の 実地的技術的課題 への応用研究と教授，そしてそれに伴う大学の専門分化を強調したのである。そういう全体的傾向の中において自由教育の意義が，例え不十分であったとはいえ，早くから認められていたことはやはり注目に価すると思う。この後20世紀に入り科学がますます進歩するにつれて，自由教育の意義はますます重要とってくるのである。

オクスフォード、ケンブリッジのカレッジが静かな田園や牧草地を背景にたてられたのに対して、地方大学が市の中心、工場地域あるいは「スラム街のただ中の不用になった精神病院」<sup>(49)</sup>などに開かれたことは、やはりその地方的市民的性格による。学生は原則として大学周辺の地域から通った。そしてその殆んどが公立の小中学校を経て来たものであり、中流階級以下の出身であることは、私立のパブリック・スクール出身中流階級以上の子弟を多く入れたオクスフォード、ケンブリッジとは対照的である。大学教育をより広い社会層に開放したことは、地方大学のイギリス大学制度への重要な貢献の一つである。

地方大学が発展の途次、ロンドン大学の「学外学位」に頼ったことは意味がある。「学外学位」は一方においてそのカレッジの学術的な自律性を拘束したが、他方新しいカレッジの学術的水準をそれまでに認められていた所まで高めるのに貢献した。あいつぐ新大学の設置、量的拡充による大学の質の低下は、なによりもまづこの「学外学位」制度によってチェックされたわけである。

こうして中世的大学とはさまざまな面で異り、ロンドン大学とはその市民的性格において共通しながらも、なおいろいろ異った特質をもった地方大学が19世紀後半に成立したわけである。もちろんその違いを強調し過ぎたかもしれない。例えば地方大学が、いわゆる国立でもなく、また私立でもない議会立法と勅許状によって成立している自治的団体であることにおいては、他の大学と変りはない。ローカルなものではあるが、同時にすぐれてナショナルなものであることは前に述べた。しかしともかくこうした大いに異った類型の大学が並存し、それぞれ影響しあい、また独自の機能を果そうとしたことはイギリスの大学制度の著しい特色であるといえよう。

(本学講師)

註

- (1) Quoted in G. M. Trevelyan ; *British History in the Nineteenth Century and After* 1948, p. 26

- (2) アカデミに関しては例えば I. Parker; *Dissenting Academy* 1914  
N. Hans; *New Trends in Education in the Eighteenth Century* 1951  
参照
- (3) スコットランドの大学教育については J. C. Kerr; *Scottish Education, School and University* 1910, J. D. Mackie; *The University of Glasgow* 1954 など
- (4) なお当初の24人の教授のうち12人がスコットランドから, そのうち8人がエジンバラ大学から招かれた。また残り12人のうちケンブリッジから6人, 外国からは6人であった。
- (5) J. Mill; *Article on Westminster Review* 1826, quoted in B. Simon; *Studies in the History of Education* 1960, p.120
- (6) 1851年において, 29の一般のカレッジ, 60近くの医学のカレッジがロンドン大学の学位をとる機関となった。
- (7) Quoted in J. W. Adamson; *English Education 1789-1902* 1930, p.92
- (8) A. Flexner; *Universities, American, English, German* 1930, p.131-2
- (9) Sir Walter Moberly; *The Crisis in the University* 1949, p.30-36
- (10) do. p. 36—43
- (11) J. S. Mill; *Inaugural Address Delivered to the University of St. Andrews* 1867
- (12) B. Simon; op. cit., p.79-84
- (13) W. H. G. Armytage; *Civic Universities* 1955, p.172
- (14) Mark Pattison; *Suggestions on Academic Organization* 1868, quoted in C. C. Gillispie; *English Ideas of the University*, p.31
- (15) James Mill; article on "Education" 1818, quoted in B. Simon; *Studies in the History of Education* 1960, p.90
- (16) B. Simon; op. cit., p.94
- (17) E. Copleston; *A Reply to the Calumnies of the Edinburgh Review against Oxford* 1810, quoted in S. J. Curtis; *History of Education in Great Britain* 1957, p.447
- (18) S. J. Curtis; op. cit., p.449-451
- (19) J.H. Newman; *The Idea of a University*, p. ix Longman's edition 1905
- (20) M. Pattison; article in *Essays and Reviews*, quoted in H. C. Barnard; *A Short History of English Education* 1949, p.140
- (21) M. Pattison; *Memoirs* 1885, quoted in R. O. Berdahl; *British Universities and the State* 1959, p.30

- (22) ロンドン大学では1880年に女子にはじめて学位号を授けた。
- (23) C. C. Gillispie; *English Ideas of the University in the Nineteenth Century*, p. 44, in M. Clapp; *The Modern University 1950*
- (24) Sir Walter Moberly; *The Crisis in the University 1949*. p. 30-36
- (25) E. B. Pusey; *Collegiate and Professional Teaching and Discipline 1854*, quoted in C. C. Gillispie; *op. cit.*, p. 40
- (29) W. Whewell; *On the Principles of English University Education 1837*, quoted in Moberly; *op. cit.*, p. 31
- (27) Freeman and Dickinson; *Suggestions*. quoted in J. W. Adamson; *English Education 1789-1902 1630*, p. 192
- (28) 例えばサイモンはその著書 B. Saimon; *Studies in the History of Education 1960* において、スカラシップ制度が全く能力のみを基礎として開放されたことは、貧困書生のためのスカラシップを廃止することとなり、その結果1854年より1904年の間貧困学生がオクスフォード、ケンブリッジ両大学に入ることをもっとも困難にしたと述べた。(Ibid. p. 298) この大学を中産階級からさらに労働階級に開放しようとする動きは、新大学においては19世紀中に部分的に果されようとしたが、オクスフォード、ケンブリッジ両大学においては20世紀の課題として残されたのである。
- (29) Newman; *op. cit.*, p. 145
- (30) Sir Eanest Barker; *British Universities 1949*, p. 23
- (31) 1859—65年の自由党内閣の教育長官 Vice-President of the Board of Education であり、1868—74年自由党内閣大蔵大臣であった Robert Lowe の言葉 Quoted in S. J. Curtis; *History of Education in Great Britain 1957*, p. 256
- (32) 科学運動に関してはなお J. D. Bernal; *Science in History 1954*, Simon; *op. cit.*, Armytage; *op. cit.*, 参照
- (33) 成人教育に関してはたとえば R. Peers; *Adult Education 1958*
- (34) Quoted in J. W. Adamson; *op. cit.*, p. 433
- (35) H. B. Charlton; *Portrait of a University 1951*, p. 26, quoted in J Simmons; *New University 1958*, p. 20
- (36) Quoted in W. H. G. Amytage; *op. cit.*, p. 219
- (37) M. Arnold; *Higher Schools & Universities in Germany 1882*, p. 216
- (38) Quoted in J. W. Adamson; *op. cit.*, p. 443
- (39) 1870年ケンブリッジ大学において Cavendish Laboratory ができ、多くの科学者が育てられた。
- (40) 1890年以降大学およびユニバーシティカレッジに「通学制師範学校」

Day Training College が創設された。

- (41) これが範をとったとみられる F. D. Maurice の London Working Men's College (1854年創立) では、幾何、代数、文法、製図、聖書、政治、地理、歴史、実用法律などが教えられた。R. Peers; *Adult Education* 1946, p. 43
- (42) Quoted in J. W. Adamson; *op. cit.*, p. 433
- (43) Quoted in W. H. G. Armytage; *op. cit.*, p. 223
- (44) Quoted in J. W. Adamson; *op. cit.*, p. 443
- (45) Quoted in W. H. G. Armytage; *op. cit.*, p. 243
- (46) Quoted in R. U. Berdahl; *op. cit.*, p. 52.
- (47) シェフィールド大学の創立運動に用いられたポスターに示された次のようなスローガンはこの地方大学のみならず、全地方大学の意図するところをたんに伝えている。「大学を支持せよ。なぜならば、(1)この大学は人民のためのものである。(2)この大学は労働階級の子弟に最高の教育を与えることができる。(3)この大学は地方の産業を助けることができる。(4)この大学は事故や疾病の対策の研究される場所である。(5)シェフィールドは大学のない唯一の大都市であり、このままにすまされない。(6)この大学はこの地方に有利であるばかりでなく、他の国々との産業競走においてわが国を助けることができる。」A. W. Chapman; *The Story of a Modern University* 1955, p. 188
- (48) たとえばシェフィールド大学ではコートは約 300 人、カウンスルは 37 人、セネットは 28 人のメンバーからなる。カウンスルのうち学内から任命されるものは副総長、学部長、セネット代表の 6 人である。
- (49) リバプールの例である。Quoted in W. H. G. Armytage; *op. cit.*, p. 224

## 参 考 文 献

- (1) 19世紀の大学改革全般に関するもの
- Adamson, I. W ; *A Short History of Education*, 1930
- Adamson, J. W ; *English Education 1789-1902*, 1930
- Armytage, W. M. G ; *Civic Universities*, 1955
- Armytage, W. M. G.; *The Rise of Civic Universities in England*, in the *Yearbook of Education* 1959
- Arnold, M.; *Schools and Universities on the Continent*, 1868
- Barker, E ; *British Universities*, 1949
- Barnard, H. C.; *A Short History of English Education*, 1947
- Berdahl, R : *British Universities and the State*, 1959
- Clarke, M. J.; *Classical Education in Britain 1500-1900*, 1959

- Curtis, S. J.; *The History of Education in Great Britain*, 1950  
Flexner, A.; *Universities, American, English, German*, 1930  
Gillispie, C. C.; *English Ideas of the University in the Nineteenth Century*, in M. Clapp, M.; *The Modern University*, 1950  
Huber, V. A.; *The English Universities*, 3 vols., 1943  
Jarman, T. L.; *Landmarks in the History of Education*, 1951  
Kneller, G. F.; *Higher Learning in Britain*, 1955  
Moberly, W.; *The Crisis in the University*, 1949  
Newman, J. H.; *The Idea of a University*, 1893  
Simon, B.; *Studies in the History of Education 1780-1870*, 1960  
Simons, J.; *New University*, 1958

(2) 個々の大学に関するもの

- 各大学発行の *Prospectus*, *Calender*, *Handbook* の他に  
オックスフォード, ケンブリッジ大学  
Attwater, A.; *Pembroke College, Cambridge*, 1939  
Brodrick, G. G. C.; *A History of the University of Oxford*, 1886  
Gardner, A.; *A Short History of Newham College, Cambridge*, 1921  
Godley, A. D.; *Oxford in the Eighteenth Century*, 1909  
Hodgkin, R. H.; *Six Centuries of an Oxford College: A History of the Queen's College, 1340-1940*  
Lyte, M. H. C.; *A History of the University of Oxford*, 1886  
Mallet, C. E.; *A Short History of the University of Oxford*,  
Vol. 1 *The Mediaeval University* 1924  
Vol. 2 *16th and 17th Centuries* 1924  
Vol. 3 *Modern Oxford* 1927  
Mansbridge, A.; *The Older Universities of England—Oxford and Cambridge*, 1923  
Mullinger, J. B.; *A History of the University of Cambridge*, 1888  
Rashdall, H.; *The Universities of England in the Middle Age*, Vol. 3  
Steegman, J.; *Cambridge As It Is Today*, 1949  
Stubbs, C. W.; *The Story of Cambridge*, 1905  
Tillyard, A. T.; *A History of University Reform from 1800 A. D. to the Present Time*, 1913  
Winstanley, D. A.; *Early Victorian Cambridge*, 1940  
Winstanley, D. A.; *Later Victorian Cambridge*, 1947  
Winstanley, D. A.; *Unreformed Cambridge*, 1935

## ロンドン大学

Allchin, W. H.; *Account of the Reconstruction of the University of London, 1905-11*

Bellot, H. H.; *University College, London, 1826-1926, 1929*

Dunsheath, P. & Miller, M.; *Convocation in the University of London, the First Hundred Years, 1958*

Hearnshaw, F. J. C.; *Centenary History of King's College, 1929*

Humberstone, T. L.; *University Reform in London, 1926*

## ダラム大学

Whiting, C. E.; *The University of Durham, 1932*

## マンチェスター大学

Charlton, H. B.; *Portrait of a University, 1951*

Fiddes, E.; *Chapters in the History of Owens College and of Manchester University, 1937*

Thompson, J.; *The Owens College: Its Eoundation and Growth, 1886*

## バーミンガム大学

Vincent, E. W. & Hilton, P.; *The University of Birmingham, Its History and Significance, 1947*

## リバプール大学

Muir, R.; *A Plea for a University of Liverpool, 1901*

## リーズ大学

Shimmin, A. N.; *The University of Leeds, the First Half Century, 1954*

## シェフィールド大学

Chapman, A. W.; *The Story of a Modern University, A History of the University of Sheffield, 1955*

## ブリストル大学

Cottle, B. Sherborne; *The Life of a University, 1951*

## レディング大学

Childs, W. M.; *Making a University, 1933*

## ノッチンガム大学

Beckett, E. M.; *University College of Nottingham, 1928*

Wood, A. C.; *History of the University College of Nottingham, 1953*

## ウェルズ大学

Davies, W. C. & Jones, W. L.; *The University of Wales, 1905*

Evans, D. E.; *The University of Wales, 1953*



# University Reform in the Nineteenth Century England

(English Résumé)

Tetsuya Kobayashi

The people in England believe in the virtue of diversity. Like many other English institutions, English universities do not follow a uniform pattern, not constitute a uniform system, though they share the common characteristics which distinguish them from universities in other countries. The English university system, as such, is a system of great diversity, consisting of eighteen universities (including a Welsh university and a university college) which differ in many respects. It is customary, however, to classify them into three divisions; the University of London, the universities of Oxford and Cambridge, and other civic or provincial universities. The classification came into existence in the 19th century, one of the most remarkable centuries in the history of university education. Excluding the two ancient universities of Oxford and Cambridge eleven civic universities are the products of the industrial and social development of the 19th century England. Even Oxford and Cambridge have been able to keep their position as the senior universities only by the result of the university reform in the 19th century.

The object of this study is to describe, in the light of the social political and economical changes of the 19th century England, the ways in which the three classes of English universities were created and reformed, and to point out their characteristics and significance within whole English university system. An outline of the contents follows:

## Preface

- 1) Prefactor remarks on this study
- 2) Oxford and Cambridge in the 18th century

1. Foundation of the University of London
  - 1) Discontent with Oxford and Cambridge and the foundation of the University College, London
  - 2) King's College and the University of London; its foundation and development
  - 3) Characteristics; Liberal, utilitarian, secular, modern, civic and federal
2. Reform of the Universities of Oxford and Cambridge
  - 1) Arguments; pros and cons
  - 2) University reform through Parliamentary actions
  - 3) Characteristics; Christian-Hellenic, national responsibility, liberal education and self-government
3. Development of the Provincial Universities
  - 1) Demands for the provincial universities
  - 2) Forerunners of the provincial universities in the early 19 th century
  - 3) Foundation of the university colleges and their development to the universities
  - 4) Characteristics; local and national responsibility, civic control, specialized education and wider social bases